

# 交通 評論



歴史に「もし」はないといわれている。福島第一原発事故は3年たっても解決には程遠いが、政府や首都圏の多くの人にとっては

「過去」(つまり歴史)になり始めているようにも見受けられる。しかし、次のような「もし」は私たちの記憶に生々しいと言えないだろうか。約14万人の避難者たちがまだ困難な生活を強いられている現状を踏まえて、もう一度、そのことを考えてみたい。

一つ目は「もし」、福島第一原発の故吉田昌郎所長が東電本社の命令通りに海水による冷却を停止していたらである。水素爆発が続いて、メルトダウンを起した炉心が、さらに水蒸気爆発を起してチェルノブ

イリ原子炉事故のようになり飛散する可能性があったが、彼が海水による冷却を続けたためにこれだけは防いだ。この事実は原発事故がまた予断を許さない段階で報道されたが、その後多くの人から忘れられているように見える。

最近友人が送ってくれた東工大の同窓会誌の追悼号を見て、当時の様子を改めて知った。当時の東京電力の対応、特に本社上層部のひどさは目を覆うばかりであったが、現場で指揮を執った吉田氏の確かな判断がなかったらもっと深刻な事態になっていたであろう。いま、原子炉の格納容器にひびが入った2号炉を中心に汚染水のもれが続いているが、冷却を続けてタンクにためることで何とか現状を

維持している。その結果、放射性核種の放出量はチェルノブイリ原子炉1基から放出されたものの10分の1程度、汚染面積も16分の1程度で収まっている。福島第一原発では3基がメルトダウンしているの、一つ間違えばチェルノブイリ事故の何倍も甚

でできる。この時点の情報から、燃料破損に続いてコア・コンクリート相互作用が発生すれば、強制移転が半径170km、年間線量が自然放射能を超える地域が250km<sup>2</sup>(関東全域を含む)に達にも広がる可能性が記されている。

飯館村などに高濃度の汚染をもたらす、今なお人が住めない状態が続いている。もし、15日に北東の風が終日吹き続けていたら、放射性核種の大部分は首都圏の上空に運ばれ、そこで雨が降れば東京都1300万人が避難を余儀なくされたはずである。

## 「もしのもし」

土器屋 由紀子

大きな被害が予想できたのである。

2011年3月25日に作成された元原子力委員会委員長・近藤駿介東大名誉教授による「福島第一原子力発電所の不測事態シナリオの素描」(いわゆる最悪のシナリオ)が、2012年1月30日に内閣府より情報開示を受けてネットで閲覧

に終日北東の風が吹いていて、東京に降水があったらである。佐藤康雄・元気象研究所研究部長は著書「放射能拡散予測システムSPE EDI」なせ活かされなかったか(東洋書店、2013)の中で述べているが、

たまたま、最も放射性核種を多く放出した2号炉が水素爆発を起した日の夕方から夜にかけて風向が南東に変化し福島県中通り、阿武隈山地、浜通りにみぞれを降らせたため、浪江町、

これら二つの「もし」が一方だけでも起こっていたら、全都避難で、国としての機能が維持できただろうか。これはあり得ない仮定ではない。いま、まだ約14万人が仮設住宅や借家に暮らし先行きの見通しが立っていない。これと同じことが、

東京都民に起こった可能性があった。事故から3年がたち、首都圏には震災と事故を忘れてしまったかのようない日常があり、原発再稼働への動きすらある。そんなに簡単に当時の恐怖を忘れてしまっただけののだろうか。(江戸川大学名誉教授)